

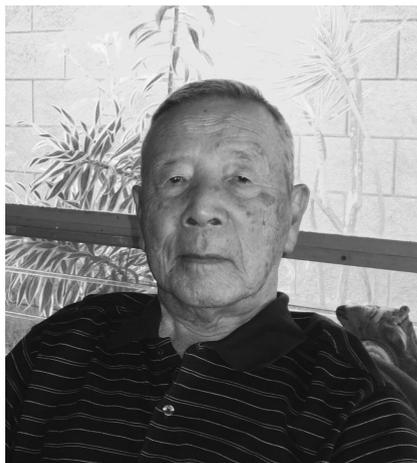
## 村上多喜雄名誉会員のご逝去を悼む

本学会名誉会員、村上多喜雄ハワイ大学・マノア校名誉教授は、2013年7月16日胆管癌のため92歳で逝去されました。昨年末にご自宅を訪ねた際には大変にお元気で、まだまだしばらくはご活躍されると思っただけに、全く信じられない思いです。

先生は1921年石川県金沢市に生まれました。古川武彦氏の「人と技術で語る天気予報史」(東京大学出版会、2012)によれば、当時大学への進学がままならず、将来気象技術官養成所への道も開かれているということで、1940年に陸軍気象部に入られました。1年後に養成科本科に進まれ、卒業後の1943年には、兵役で仙台航空幹部候補生少尉になりました。この頃は別に気象に興味があったわけではなく、生きる術としての選択であったといます。そんな中でも血気は盛んな若者であったようで、仙台では特攻隊に志願しようとして、上司から却下されたというエピソードを奥様から伺いました。歴史にifはありませんけれども、上司の判断の重さを痛感します。

復員後の1945年に故郷の金沢測候所の予報官となり、1年後には養成所研究科に合格。卒業後は中央気象台測候課に入りました。住 明正氏が1987年に「天気」に掲載したインタビュー記事によれば、養成所では気象学には全く興味が持たず、卒業研究のこともほとんど忘れてしまったそうです。ところが測候所で気球を揚げて上空の風を毎日観測していた時に、ある日突然に西風から東風に変わりました。それが梅雨明けと同時にあったことに気が付き、なぜだろう?という疑問がわいて、気象学の研究に目覚められました。20代も終わりに近い1950年頃のことでした。

観測結果をつきつめていく先生の気象学研究のスタイルは、生涯貫かれます。しかし測候課での業務として、この発見を深める研究をすることは許されず、結婚して間もない奥様の信子様を観測結果を読み上げてもらいながらの夜なべ仕事で、高層風の時系列変化などの図を作られたそうです。そして、この東風の出現が、偏西風のジェット気流がチベット高原の南から北へとジャンプするのと同時であることを発見されま



す。先生の本格的なモンスーン研究への道は、こうして開かれました。

この発見は、上司であった吉武素二測候課長のところに来ていた東京大学正野重方教授の目にとまり、英語での論文執筆を勧められました。その後100編を超える論文を書かれた先生ですが、最初に英語で書いた時には大変に苦しく、正野先生の激励でようやく完成されたそうです。そして吉武課長の推薦で気象研究所に転勤し、本格的な研究生活に入られました。この転勤は、吉武課長の上司の観測部長には反対され、大喧嘩の末に決まったそうで、先生は機会あるごとに「吉武先生には本当にお世話になった。人の恩は忘れてはいけない」と言っておられました。この研究は先生の博士論文になり、1955年に「梅雨あけの機構に関する研究」で日本気象学会賞を受賞されました。英語の論文をMITのStarr教授に送ったところ、教授からMITへの招待を受けることとなり、1960年に太平洋を単身船で渡って初めて海外での研究生活を始められました。4年ほどを過ごされたMIT時代はとても良い勉強になった、と先生はいつも回想されていました。特にPhillips氏には良く話を聞いてもらい強い影響を受けたそうです。一方で、ぶっきらぼうなCharney氏とはあまり話をせず、招待を受けたStarr氏からも影響は受けなかったといえます。人間の出会いの

妙を感じます。

その後1968年には、設立されて間もないインドの熱帯気象学研究所 (Indian Institute of Tropical Meteorology, IITM) に WMO の専門家として招かれ、ご家族ともどもプーナに滞在されました。私費をはたいて同行された奥様や長女の亮子様にとっては、この時飛行機を降りるなり牛糞の匂いがするなど、辛い生活だったようですが、先生はモンスーン気候の下での研究生活を堪能されたようです。

インドからの帰国後には、またすぐにアメリカの NOAA から招聘を受けて再度の渡米をされます。海外に行く人がまだ稀だった当時、頻繁に海外出張を繰り返す先生に対する職場での評判は悪く、他に旧ソ連に行く話などもあったのに、上司からの許可が得られませんでした。そこでこの時には、「もはや日本に帰らない」との決意を固められていました。しかし NOAA での生活は、行政官としての将来を考えると自分には合わない、と感じていたところ、C. S. Ramage 教授に乞われ、1969年にハワイ大学に赴任することになりました。Ramage 教授は香港気象台からハワイ大学に移り、欧米で最初のモンスーンに関する教科書“Monsoon Meteorology”を著し、アメリカのモンスーン研究の中心地としてのハワイ大学気象学教室を構築されていた方でした。

先生はハワイ大学で、モンスーン研究を思う存分に進められました。特に1970年代には、地球大気研究計画 (GARP) の Monsoon Subprogram で、1978-79年の夏と冬に大規模な集中観測を実施したモンスーン観測実験 (MONEX) での最初の WMO 委員に任命され、その立案からプロジェクトの実行、取りまとめに至る膨大な任務を遂行されました。

ハワイ大学では、日本から住 明正氏、中澤哲夫氏、岩嶋樹也氏、中国から He Jinhai 氏、Ding Yihui 氏らが次々と長期滞在して共同研究を進め、また後にネパール気象水文局長になった Madan L. Shrestha 氏らに学位を授与されました。一方で MONEX の疲れもあったのでしょうか、還暦を迎えられた1981年には心筋梗塞で10日間入院をされます。先生は剣道5段の腕前で、ハワイ大学では学生に教えていたこともあったそうですが、これを機に剣道はやめられました。

1986年には「モンスーン研究とその発展に尽くした功績」により、本学会の藤原賞を受賞されます。東京堂出版から「モンスーン」という和文著書を出された

のもこの年でした。1987年にはハワイ大学に Bin Wang 教授を迎え、3年間一緒に仕事をされます。元来理論屋だった Wang 教授は、観測データの解析的研究について先生から多くを学んだそうです。1990年には69歳でハワイ大学を引退され、その後3年間は週1回のコンサルタントとして定期的に大学に来られていましたが、それが終わった1994年以降は大学に来ることは少なくなったといえます。

私が先生に初めてお会いしたのは、ノートが残る限りでは1983年3月の東京大学理学部地球物理学教室気象学研究室でのセミナーで、MONEX の成果の一つであるモンスーンの季節内変動に関する話でした。今思うと心筋梗塞から復活された矢先だったのですが、とても活気のある発表で、当時すでに60歳を過ぎ、現在の私より年上だったとは、とても信じられません。

この頃先生は、毎年1~2回ほど気象学研究室のセミナーに来て、MONEX の最新の研究成果などについて、熱心に話をされました。私自身修士論文で東アジアやインドのモンスーンに興味を持ち始めた頃で、MONEX や FGGE などの国際共同研究が華々しく進められ、毎号のように気象集誌などに発表される先生の成果を畏敬の念を抱きながら読んでいたので、論文の著者自身による話を大変に興味深く聞き、強い刺激を受けました。その後1988年にインドのプーナの IITM で開催されたモンスーンの国際会議では、当時まださほど研究成果も挙げていないのに本学会から代表として派遣され、初めて先生と親しく話す機会を得ました。会議では最前列に座って、インド人の巻き舌英語にも負けず、活発に質問をされていたお姿が強く印象に残っています。

運命の出会いのは、1992年9月に筑波の気象研究所の村上勝人氏を中心になって企画された“International Symposium on Asian Monsoon”でした。この時私は、当時ようやく10年程のデータが蓄積されてきた風の客観解析データと OLR の半旬平均値を作成し、アジアモンスーン域での地図にした科研費報告書を先生に差し上げました。すると2ヶ月ほど経った12月には分厚い封筒が送られてきました。私が作成した図から風速や OLR の値を読み取り、グラフ用紙に手書きでプロットされた図が多数同封されていました。手紙には「これは大変に貴重な資料だから、計算機でプロットした図を作成して共同研究をしてほしい」、「報告書は何回も何回もくり返し使っているうちにバラバラになってしまった」と書かれていました。こうして先生

との共同研究が始まりました。先生は論文を書くのに大変に慎重で、「論文は何回も書き直し mistake のないようにせねばならない」と、きびしく諭されました。東京大学や筑波大学などのセミナーで何度も発表しては、参加者からのコメントを活かして改訂を重ねました。原稿が完成すると東京大学の気候システム研究センターの新田 勅教授に意見を求められたりもしました。投稿した後は「レフェリーの言う事は大体が正しいから、よく考えてきちんと対応しなくてはいけない」と言われました。西部北太平洋モンスーン (WNPM) を世界で最初に発見した Murakami and Matsumoto (1994) の気象集誌の論文は、こうした長いやり取りの末でできあがりしました。先生のこの謙虚さには、深く学ばされます。

その後10年ほどの間に、4編ほど共著で論文を書きましたが、全てを手紙でのやり取りと、年に2回程の先生の来日時での議論だけで書きました。先生は日本を旅するのが大好きで、特に春と秋の良い季節に故郷の金沢ほか、日本各地を奥様やご家族と訪ねられていました。その合間に研究室に突然電話がかかってくる、研究室やホテルで論文の相談をしたこともありました。

実は私自身は、1999年に開かれた村上先生・柳井先生の退職記念シンポジウムまで、ハワイに行ったことがありませんでした。この時はやはり論文内容の議論をするため、空港までご自身で運転されて私を出迎えて下さり、ご自宅まで送っていただきました。限られた時間でしたが、とことんデータを観察し、そこから鋭い洞察によって新しい発見をされる先生の研究法を、間近に垣間見ることができました。先生はしばしば「データの分布から式を考える」とも言われました。

2006年4月には、マレーシアのクアラルンプールで開かれた“Symposium on Asian Monsoon, Winter MONEX: A Quarter Century and Beyond”に出席され、当時白内障の手術をされた直後でサングラスをかけながら、OHPでの迫力ある発表と座長をされたのが最後の国際会議となりました。

晩年は、梶川義幸氏が作成した“Today's Monsoon”を、ご自宅のコンピュータで見られるのが日

課で、その結果をオーストラリア気象局の John McBride 氏が主宰している monsoon mailing list にしばしば投稿されていました。パーキンソン氏病と脊柱狭窄症にかかり、車椅子での生活になっていましたが、昨年末にご自宅を訪ねた際には、「下半身は不自由でも、頭は全く問題ない」と言われ、春にご家族で行かれた金沢への温泉旅行の際に温泉に入れなかったことを悔んでおられました。今年の3月にはオーストラリアモンスーンの変調に関する手紙をいただき、再度の共同研究になりかかっていたのに、それを先生と成し遂げることはできなくなってしまいました。自分自身の怠慢には痛恨さわまります。そして2013年6月5日に中国科学院大気物理学研究所の Wu Guoxiong 教授に対して、ベンガル湾でのモンスーン開始についてコメントを書かれたのが、最後の先生からの投稿メールになりました。

6月16日、ご家族との父の日の夕食の席で、先生は初めて体調の変調をうたえられました。その後精密検査を受けた時には、癌が直径5cmにもなっていました。それでもその後1カ月間、ほとんど苦しまれることもなく、コンピュータ技術者である息子さんが、病床で使うためのノートパソコンを手配しようとしていた矢先に、静かに息を引き取りました。

高層観測や衛星観測、客観解析、数値モデルなど、前世紀後半での気象学の革命的発展期に、数多くのモンスーンに関する著作を残され、モンスーンを中心とした熱帯気象学・気候学の世界的研究を切り拓かれていかれた先生からは、今なお多くのことを学ばねばなりません。先生のご逝去は誠に残念です。残された我々は2014年の日本気象学会春季大会で専門分科会「モンスーン・熱帯気象研究の新たなブレイクスルーを目指して—村上多喜雄先生追悼特別セッション—」を、また一周忌にあたる2014年7月には、ハワイ大学で“Takio Murakami Memorial Symposium on Tropical Meteorology”を開き、そのご功績をたたえと共に、新たな研究の発展に尽くすことで、少しでも先生からいただいたご恩に報いていきたいと思いを。

(松本 淳, jun@center.tmu.ac.jp)